

「本」を直し「人」とつながる



▲
実習室で絵本を修理する渡辺さん。「技術を磨いて、後継者を育てたい」
(おやさとかた東左第4棟で)

お やさとかた東左第4棟4階18番教室。引き戸を開けると、エプロン姿の渡辺あや（44歳・本^{ほん}豁^{かつ}分教会長後継者夫人・天理市）が「こんにちは」と笑顔で出迎える。

この教室は、布教部所管の「ひのきしんスクール」（板倉知幸運営委員長）の講義や研修会で使用される図書修理実習室。講師を務める渡辺は、3年ほど前からこの部屋を開放して、修理技術の指導に当たっているほか、修理に関する相談に乗ったり、持ち込まれた本を修理したりしている。

高校卒業後、鉄工関係の会社に就職。社内の研究所で鉄の研究に従事した後、 $\frac{3}{2}$ 歳のとき、天理在住の夫と結婚した。子供のころから、どちらかと言えば本を読むのは苦手なほう。思いがけず本と関わることになったのは、知人のつながりで同スクールの手伝いを始めたことがきっかけだった。

当初は、講義の受付や講師の接待といった裏方の仕事を中心だった。こうして手伝いを続けるうちに「私も図書修理の理解を深めて、講師の先生や受講生をサポートしたい」と思うようになった。天理図書館の製本室へ通い、一から修理の技術を学んだ。講師になったのは9年前だ。

教える側の立場になり、あらためて痛感したことがある。

それは「図書修理は、やる気があっても道具がそろわなかったり、相談相手が近くにいなかったりして、途中で挫折する人が少なくない」ということ。

そこで、同スクールと相談のうえ、実習室を月4回開放してもらうことに。以来、講座の修了者など、定期的に利用する人が出てきている。

訪れるのは、ほとんどが年上の人。「親子ほど年の離れた方に『先生、なんて呼ばれると、ちょっとくすぐったい』。それでも『ここへ来たら、修理に関して分からないことが、すぐに解決する』と喜んでくださることが、何よりうれしい」

実習室には、長年使っている「おふでさき」や、傷んでボロボロになった教会史などを持ち込んでくる人が少なくない。

「本が破損したら、修理するよりも新しい物を買うほうが手軽で、安くつく場合が多い。それでも『ここなら直る』と思って持ってこられるのは、その本に特別な思い入れがあるから。ひょっとすると、破れや汚れにも思い出があるかもしれない。一冊一冊に、新品には代えられない『物語』があるのだと思う」

時折『教え子、たちから「教友と小学校へ図書修理に通っている」「地元でボランティアサークルを立ち上げた」といった話を聞く。そうしたときは「続けてきて良かった」と、つくづく思う。

「実習室で技術を磨き、土地所でひのきしんに励んでおられる皆さんのためにも、私自身、さらに勉強を重ねて、できることを精いっぱいさせていただきたい」

きれいに甦^{よみがえ}った本と、ひのきしん者の笑顔を原動力に、渡辺は今日も実習室へと向かう。